

「知って楽しむ、仏像の読み解きかた」

高野山大学 那須 真裕美

1. 仏像を読み解くために

◆ ほとけの種類（尊格分類）



①如来 (仏)	修行を完成したものの意で、その像容は、俗世を離れたことを示す螺髪、身には装身具を一切着けず、衲衣（大衣）のみをまとう。
②菩薩	覚りを求める存在と解され、像容は古代インドの王侯貴族の姿に基づく。宝冠や天衣、様々な装身具を着ける。
③明王	密教特有のほとけ。教義的には、如来が通常の姿では教化し難い衆生を屈服・教化するために恐ろしい姿をとったものと説明される。
④天 (天部)	仏教以外のインドの神々（仏教よりも古くから存在する土着神やバラモン神、ヒンドゥー教諸神）を取り入れ、護法神としたもの。

◆ 日本仏教の主な宗派

成立	宗派名	宗祖	本山	所依經典	傾向
飛鳥	法相宗	道昭	興福寺、薬師寺	『解深密經』など	学問仏教の隆盛
奈良	華嚴宗	良弁	東大寺	『華嚴經』	
	律宗	鑑真	唐招提寺	『梵網經』など	
平安	天台宗	最澄	延暦寺	『法華經』	密教の導入
	真言宗	空海	金剛峯寺、東寺ほか	『大日經』『金剛頂經』	
	融通念仏宗	良忍	大念仏寺	『法華經』『華嚴經』	
鎌倉	浄土宗	法然	知恩院	浄土三部經	民衆救済のための新仏教の登場
	浄土真宗	親鸞	東本願寺、西本願寺ほか	浄土三部經	
	臨済宗	栄西	建長寺、妙心寺ほか	—	
	曹洞宗	道元	永平寺、總持寺	—	
	日蓮宗	日蓮	久遠寺	『法華經』	
	時宗	一遍	清浄光寺	浄土三部經	
江戸	黄檗宗	隠元	萬福寺	—	仏教の国際化

(『図解日本の仏教と宗派』宝島社、2013 掲載表などにに基づき構成)

◆ 造像作例数の傾向と時代性

	薬師如来	釈迦如来	阿弥陀如来	大日如来	弥勒菩薩	聖観音	十一面観音	地藏菩薩	不動明王	四天王	仁王
飛鳥	○	◎			◎	○				○	
白鳳	○	◎	○		◎	○				○	○
天平	◎	◎			◎	○	○			○	○
貞観	◎	◎	◎	◎		◎	○	○	○	◎	
藤原	◎	○	◎	◎		◎	◎	◎	◎	○	○
鎌倉	○	◎	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
室町	○	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
桃山	○	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
江戸	○	○	◎	○	○	○	○	◎	◎	○	◎

「◎」は作例数が顕著に多い、「○」は比較的多い程度を意図する
(西村公朝・小川光三『仏像の見分け方』、新潮社、1987 掲載表を一部改変)

2. 姿かたちから分かること

◆ 三十二相

- ・ 仏、あるいは転輪聖王^{てんりんじょうおう}の身体に具わっている 32 のすぐれた特徴、もしくは吉相。
- ・ 80 のすぐれた副次的特徴^{しゅごう}（八十種好）と併用される。

(1) 足下安平立相	(12) 毛上向相	(23) 齒齊相
(2) 足下二輪相	(13) 一一孔一毛生相	(24) 牙白相
(3) 長指相	(14) 金色相	(25) 獅子頬相
(4) 足跟広平相	(15) 丈光相	(26) 味中得上味相
(5) 手足指縵網相	(16) 細薄皮相	(27) 大舌相
(6) 手足柔軟相	(17) 七処隆満相	(28) 梵声相
(7) 足趺高満相	(18) 両腋下隆満相	(29) 真青眼相
(8) 伊泥延膊相	(19) 上身如獅子相	(30) 牛眼睫相
(9) 正立手摩膝相	(20) 大直身相	(31) 頂髻相
(10) 陰蔵相	(21) 肩円好相	(32) 白毛相
(11) 身広長等相	(22) 四十齒相	

(名称、順序は『大智度論』に基づく)

「知って楽しむ、仏像の読み解きかた」

◆ 印相(mudrā)

仏・菩薩・明王などの諸尊格の働き・功德を象徴的に表現するもの。狭義には、造形表現された仏像・仏画などで手の指の屈伸や形によって表される手印を指す。インドでは古来、手の指や足の形などの姿で感情や意志を表現する伝統があり、それが尊像にも用いられた。
(『仏教美術事典』、東京書籍)

- ◇ 施無畏印・与願印 「如来の通印」
- ◇ 定印 (禅定印・法界定印) 禅定 (瞑想) していることを表現する
- ◇ 説法印 (転法輪印) 説法をしていることを表現する
- ◇ 降魔印 (触地印) 覚ったことを示す (日本では作例が少ない)
- ◇ 智拳印 大日如来に特有の印相

◆ 持物

仏像が手に執る品々のこと。持つべき持物は儀軌によって規定されており、尊格名を比定する上で、印相とともに重要視される。
(『岩波仏教辞典』第2版)

・ 菩薩の主な持物とその象徴性

持物	主な象徴性	尊格名
水瓶	本来は飲料水の容器。林野に分け入って苦行する修行者の象徴	弥勒菩薩
蓮華	煩悩の泥土から美しい覚りの花を咲かせる菩薩の慈悲を表わす	観音菩薩
ぼんきょう 梵 篋	智慧を象徴する (顕教:『般若経』、密教:陀羅尼経)	文殊菩薩、般若菩薩、 へんげ 変化観音など
金剛杵	仏教の敵対者を調伏する力を象徴	(明王など)
剣	鋭い刃が智慧の働きを象徴	文殊菩薩、虚空蔵菩薩
ほうじゅ 宝珠	衆生の願いを叶える菩薩の徳の象徴	地藏菩薩、虚空蔵菩薩
しゃくじょう 錫 杖	各地を遍歴して衆生を救済する	地藏菩薩

(田中公明『仏教図像学』、春秋社、2015 掲載表を一部改変)

◆ 造形の変容

[変化観音] 十一面観音、千手観音、不空絹索観音、如意輪観音、馬頭観音など。

- ・ 一面二臂の（聖）観音に対して、多面多臂の観音を指す呼称
- ・ 多面 ……「普門」（あらゆる方向に顔を向けるもの）の造形化
- ・ 4～5 世紀 インドで成立し、6～7 世紀に中国へ伝わり、日本には 7～8 世紀に導入されたほとけたち

[阿弥陀如来]

- ・ 原語は Amitāyus（無量寿）、および Amitābha（無量光）
- ・ 初期大乘経典に西方の仏として登場し、『阿弥陀経』『無量寿経』において、極楽浄土に住して衆生を救済する働きが確立した。
- ・ 西方の十万億土を過ぎた安楽（極楽）と呼ばれる世界（浄土）で、現在も説法しているとされる。
- ・ 阿弥陀の浄土に往生することを願う教えを浄土教と称し、日本では飛鳥時代から阿弥陀信仰が見られた。
- ・ すべての衆生の往生を受け容れ、かつ臨終に際しては現世に來迎するという思想が普及し、とくに中国・日本で大流行した。

3. 時代・信仰の変遷と造形

◆ 阿弥陀信仰の変遷と印相

白鳳時代：（如来としての信仰）	……	施無畏印・与願印
天平時代：極楽浄土で現在も説法を行う存在	……	説法印
貞観時代：密教仏としての阿弥陀如来が流行	……	定印（弥陀定印）
藤原時代：従来の阿弥陀と密教の阿弥陀が融合する	… //	
院政期時代：來迎信仰が盛んになる	……	來迎印

→ ほとけに向けられた「信仰」「願い」に応じた造形の仏像が造られる

◆ 明王というほとけ

- ・ インドで生まれた、密教特有のほとけ。
- ・ 「明」は知識、学問を意味する。明王は、知識・神秘的な呪力を統べる「王」を意図する。
- ・ 「力」を象徴するため、多くの場合、多面多臂多目の忿怒形で表現される。

→ 和様を好む時代性にあわせて、忿怒の表現もやや穏やかなものへと変化する

「知って楽しむ, 仏像の読み解きかた」

◆ 発願者^{ほつがん}の変化

「平安時代から鎌倉時代への移行期における造寺造仏は、個人的な動機に由来する作善^{さぜん}が減り、結縁^{けちえん}合力による作善が増えていく」 (正木晃「天才仏師 快慶の物語」)

- ・ 鎌倉時代の阿弥陀如来立像：三尺阿弥陀
玉桂寺旧蔵像 昭和 54 年(1979)の解体修理の際、像内より願文や数万人分の結縁^{けちえん}交名^{きょうみょう}が発見された。多くは無名の人物であるが、源頼朝やその子・頼家、実朝、また土御門上皇と順徳天皇を意味すると思われる「新院」「当君」なども見られる。
- ・ 勧進^{かんじん}による造像

